

楠本イネ

西予市



楠本イネ
(大洲市立博物館所蔵)



二宮敬作住居跡 (西予市卯之町)

楠本イネは、文政10（1827）年、長崎市銅座町でドイツ人医師P・H・フォン・シーボルトと、楠本滝との間に生まれた。

その2年後、持ち出し禁制の日本地図などを、国外に持ち出そうとしたことにより、シーボルトは国外追放となり、帰国した。日本を去る際には、イネの養育を愛弟子である二宮敬作に託したとされている。

長崎で幼少時代を過ごしたイネは、5歳のころから寺子屋に通い、読書にふけり、学識欲が強い子どもであったらしい。この頃には、父親に似て、髪は茶色で、目は青かったため、様々な偏見や差別を体験したものと思われる。

イネは13歳で長崎を離れ、現在の西予市宇和町卯之町で医者を開業していた二宮敬作を頼って卯之町までやってきた。現在、二宮敬作住居跡が古い町並みの一角にある。当時の敬作は、貧富の別なく手当は懇切丁寧で、急病と聞けば深夜でも山中へ往診し、夜を徹して治療に励んだと言われる。敬作はイネに、一般医学を学ばせ、イネは日本初の蘭方女医となる。

その後、イネは美作国（現岡山県）で開業していた石井宗謙のもとへ産科の修行へ行くことになった。

当時はまだ、多くの女性が男性の医者から治療をけることに抵抗感があり、産婆では手に負えない難産も最後まで医者を呼ばずに手遅れになってしまうことが多かった。イネが産科医になる決心をしたのは、自分が産科医になることで多くの女性の命を救うことができるという思いからだと言われている。

石井のもとで学んだ後、長崎へ帰郷していたイネは、2年後再度卯之町を訪れ、敬作と、医師・西洋学者・兵学者であった村田蔵六（のちに大村益次郎と改名）から医学や蘭学を学んだ。

シーボルトの娘として生を受け、いち早く女性産科医として日本の医学の一端を担ったイネは、当時の慣習や偏見に負けず、自分の信念を貫き通した一人の女性だった。

〔参考資料〕

西予市ホームページ政策秘書室 (<http://www.city.seiyo.ehime.jp/>)